

＜株式会社エフエム東京 第 4 2 5 回放送番組審議会＞

1. 開催年月日：平成 28 年 2 月 2 日（火）
2. 開催場所：エフエム東京 本社 10 階 大会議室
3. 委員の出席：委員総数 6 名（社外 6 名 社内 0 名）

◇出席委員（5 名）

横 森 美 奈 子 委員長 内 館 牧 子 委員
秋 元 康 委員 ロバート・キャンベル 委員
川 上 未 映 子 委員

◇欠席委員（1 名）

渡 辺 貞 夫 委員

◇社側出席者（8 名）

富木田 代表取締役会長
千 代 代表取締役社長
吉 田 常務取締役
村 上 取締役 編成制作局長
山 科 常勤監査役
延 江 編成制作局 ゼネラルプロデューサー
宮 野 編成制作局 編成制作部長
竹 井 編成制作局番組プロデューサー（オブザーバー）

◇社側欠席者（2 名）

平 専務取締役
森 田 マルチメディア放送事業本部 ゼネラルプロデューサー

【事務担当 村上放送番組審議会事務局長】

4. 議題： 番組試聴（約 31 分）

『TOKYO FM サンデースペシャル

David Bowie ～宇宙(そら)に還ったロックスター』

2016 年 1 月 24 日（日） 19:00～19:55 放送

＜議事内容＞

議題 1：最近の活動について

■2015 年 12 月度 聴取率調査結果について

2015 年 12 月の首都圏ラジオ合同聴取率調査結果が、ビデオリサーチより発表されました。（調査対象期間：2015 年 12 月 14 日～12 月 20 日）

当社メインターゲット M1F1 層（男女 20-34 才）は今回首位を奪回しました。12-59 才区分においても前回に続き首位、12-59 才のリーチ（到達率）は 12 期連続で単独首位を継続し、コアターゲットを軸に幅広いリスナーの支持を得る結果となりました。

内容としては F1 層（女性 20-34 才）で引き続き単独首位を獲得、「女性に強い TFM」の看板を守り、合わせて M1 層（男性 20-34 才）M2 層（同 35-49 才）でもスコアが上昇しました。いずれの世代も課題である聴取分数を伸ばせたことが、聴取率全体の底上げにつながりました。そして今回は当社の伸びがラジオ全体のセッツインユースを押しあげる結果にもなりました。

引き続き当社編成方針に則り、コアターゲットを中心に前後の層にも心に響く共感ある放送を心がけ、企画演出面の改善と WEB を駆使した広報戦略等により、さらなる聴取率向上を目指してまいります。

■「アース&ヒューマンコンシャス」関連の国家プロジェクトとの連動企画について

当社行動理念「アースコンシャス～地球を愛し、感じる心」「ヒューマンコンシャス～生命を愛し、つながる心」の実践として、以下の国のプロジェクトとの連動企画を継続的に実施しております。

▽環境省「つなげよう、支えよう森里川海プロジェクト」

環境省は、私たちを取り巻く自然の恵みを保全・保護しながら持続可能な再生エネルギーを引き出す新しい仕組みの構築をめざし、2014 年 12 月より、「つなげよう、支えよう森里川海」プロジェクトを立ち上げています。このプロジェクトを具現化していくためには、国民全体の意識やライフスタイルの変革が不可欠ということで、2015 年 11 月～2016 年 2 月までの間、全国 50 箇所においてシンポジウム・ミニフォーラムを開催し、国民各層の認知・理解・共感を得るとともに、地域に根ざしたボトムアップ型による国民運動へと広がっています。

「アースコンシャス」を行動理念としている当社をはじめとする JFN38 局は、

このキャンペーンメッセージを発信するメディアとして、環境省とパートナーシップを組んでいます。

JFN38 局を代表して朝のワイド番組「クロノス」パーソナリティの高橋万里恵が本プロジェクトの広報アンバサダーに就任。去る 10 月のキックオフイベントで丸川珠代環境大臣より認定証を授与された後、12 月 11 日の羽村市、1 月 25 日の新宿でのシンポジウムでもアンバサダーとして参加しました。また全国各地でのシンポジウムにおいても当該エリアの JFN 局パーソナリティがアンバサダーとなり、その地域ごとにこの運動を盛り上げます。

▽選挙権年齢が 18 歳以上に

～ I N シンポジウム supported by SCHOOL OF LOCK !

昨年 6 月に選挙権年齢が 18 歳以上に引き下げられる改正公職選挙法が成立したことに伴い、総務省が若者の政治と選挙への理解を深めるため、若者リスナーから高い支持を得ている全国 38 局ネット番組「SCHOOL OF LOCK !」(月～金 22:00～)と連携。12 月 5 日(土)としまセンタースクエア(豊島区)において、「選挙権年齢が 18 歳以上に～IN シンポジウム supported by SCHOOL OF LOCK !」を開催しました。司会を番組パーソナリティのとーやま校長、あしざわ教頭が務め、イベントの冒頭には高市早苗総務大臣も登場。250 名の 10 代リスナーに向けて自身の初めての選挙体験、政治の仕組みをわかりやすく語り、「あなたの大事な大事な一票をしっかりと考えて行使してください」と呼びかけました。この「SCHOOL OF LOCK !」と連携するシンポジウムは全国 9 都市(札幌、仙台、東京、新潟、名古屋、大阪、広島、松山、福岡)を行脚して開催、さらにその他の県庁所在地でもネットワーク系列各社がワークショップを開催致します。

当社では若者リスナーの創造と育成を重要な課題として取り組んでおり、「ヒューマンコンシャス」の象徴番組として「SCHOOL OF LOCK !」では、「18 歳」をキーワードに若者と社会との架け橋となって番組・イベント展開を計画してまいります。



▲高市早苗総務大臣と10代リスナー



▲丸川珠代環境大臣からアンバサダーに
任命された高橋万里恵

【委員の意見および社側説明】

(「○」委員意見／「■」社側説明)

○環境省のイベントについて内容の概略を教えてください。

■地元の自然の生態系について改めて知ることで、身近な自然から生まれるエネルギーや、その恵みを理解し大事にしていこう、と地元の方に呼びかけるイベントを JFN38 局のネットワークを活用して実施した。各地域の FM 局が環境省のパートナーになり全国で展開。人数的には多くても 500 人程度のきめ細やかなイベントを重ねたので、より理解が進んだのではと思う。特に地域の子供たちに対し、自分の住む地域の自然について親しむサポートができたことは、全国ネットの放送局として意義のあることだと感じている。

○このイベントの様子は、JFN の各地域における放送局でもオンエアされたのか。今後、それぞれの局でプロジェクトになると、とてもいいと思う。

■各局のパーソナリティやディレクターもイベントに参加して会場の声を集め、各エリアのリスナーに対し、放送を通じてイベント内容を共有した。1990 年からスタートしたアースコンシャス活動に地道に取り組んできて、環境問題への経験値もある JFN とコラボレーションすることでイベントに留まらず、参加者以外にも全国に環境保全の輪を広げられたと思う。また、全国ネットキー局の女性パーソナリティがメッセンジャー役としてアンバサダーを務めたことも、今後の環境省とのパートナーシップ活動に大きな役割を果たしたと思う。

○聴取率調査でメインターゲットの首位奪回というのは、とても気分のいいフレーズだと思う。いずれの世代でも課題である聴取分数を伸ばせたことが勝因とあるが、今回、聴取分数を伸ばせた理由や対策は何であったと思うか教えてください。

■この結果は、番組審議会の先生方のご指導の賜物でもあり、非常に感謝している。今回の聴取率調査では、ラジオ全体のセッツインユースが非常に大きく上がっている。結果の内訳を見ると、当社の M1F1 と 12-59 歳の数字を伸ばせたことが、そのままラジオ聴取率全体の底上げに寄与できたのではないかと感じている。

当社はこれまでもリーチが一番高い放送局であったが、一度接触した人に長く聴いてもらえない、平日ベルト番組でも月曜日から金曜日まで通して聴いてもらえない、というデータが散見されていた。そこで、一日を縦に通して聴いてもらうような演出もさることながら、リスナーが同じ番組を「明日も聴きたい」と思ってくれるような聴取習慣を生み出す演出、構成について、この 2 年ほどきめ細かく取り組んできた。その細かい課題解決の積み重ねがここに来て、ようやく実を結び、「兆

し」として見えてきた、と感じる。

また、番組内で「共感コミュニティ」という言葉で標榜しているが、当社は「感動を提供して、共感を得る」という理念を掲げている。各番組会議の中でも、「リスナーの共感を獲得する、ということはどういうことなのか」、について常に議論され、原点に戻ったものさし作りが整ったことがチームとしての連携につながり、この結果に至ったのではないかと、思う。

昨年 12 月の番組審議会で、先生方から女性の数値がいいのであれば「女性に強い TOKYO FM」とちゃんと標榜すべきではないか、というアドバイスをいただいた。プレッシャーもあったのだが、やはり業界内でも「TOKYO FM は女性に強い！」ということが囁かれるようになり、今回の結果も含め、ステーションとしての特徴を持てたのではないかと、思う。

議題 2： 番組試聴

【番組名】 『 TOKYO FM サンデースペシャル
David Bowie ～宇宙(そら)に還ったロックスター 』

【放送日時】 2016年1月24日（日） 19:00～19:55放送

【番組概要】

本日ご試聴いただくのは、『 TOKYO FM サンデースペシャル David Bowie ～宇宙(そら)に還ったロックスター 』、1月24日(日)放送回のダイジェストです。

去る1月10日、69歳で永眠したロック界のスーパー・スター、デヴィッド・ボウイ。番組では40年以上、デヴィッド・ボウイと公私にわたって親交のある写真家・鋤田正義のインタビューを軸に、偉大なロックスターの知られざる素顔に迫りました。鋤田正義は1992年 TOKYO FM 出版より「気 ki デヴィッド・ボウイ写真集」を刊行しており当社とも縁の深い人物です。

鋤田正義が撮影したデヴィッド・ボウイの代表的な1枚となるのが、アルバム『ヒーローズ』のジャケットに使われた写真です。この写真は、2013年、長い沈黙を破ってリリースされたアルバム『ザ・ネクスト・デイ』にも使われており、番組では、このポートレート撮影時の様子も振り返りました。ナビゲーターは、1990年の東京ドーム公演時に、デヴィッド・ボウイの通訳を務めた Romy がお送りしました。



▲鋤田正義とRomy



▲アルバム『ヒーローズ』に
使われた写真

【委員の意見および社側説明】

（「○」委員意見／「■」社側説明）

○追悼番組として、完璧な番組だと思った。鋤田さんと立川さんのコメントも良く、曲の流れるタイミングも感じ良い。おそらく、これまでの追悼番組の形式としては完璧だと思う。しかし、TOKYO FM として、これからの「新しい追悼番組の在り方」について考えなくてはいけないときが来たのではないか、ということを感じながら考えていた。

一方で、今回のように非常にコンサバティブな追悼番組形式も心地良く、これはこれでずっとやるべきだ、というスタイルもあると思う。でも、そうではない方法もあるのではないか。ロックスターが亡くなると、アメリカとかイギリスの放送局が一日中そのアーティストの曲を流し続けるみたいな放送をやっているが、例えばそういうこと。つまり何が言いたいかというと、今日の試聴では「言葉」というものの限界をすごく感じた。結局、近くにいた人のエピソードといっても、おおよその想像はつくし、いたずらな面を持っていて、というのも人間だから、どうしても当たり前のように聞こえてきてしまう。もっと何か、我々が知り得なかったようなことが、聞こえてくるわけではない。

MC も非常に声がいいし、心地いいと思うけれど、インタビュアーとして聴くとももの足りない。それは今、TV が抱えている問題である、“ワイドショーのコメントーターがその何か事件とか、出来事についてコメントしていることが、ただ当たり前前のことを言っているようにしか聞こえてこないこと”に、似ている。例えば、「デヴィッド・ボウイはこれからどう生き続けるんですか」という質問はないな、と思う。だって、誰にだって想像がつく。「必ずみんなの心の中で生き続ける」とか。自分がインタビューされるときでも、それは何かあまりにも獏とした質問すぎるから、その質問自体を切った方がいいんじゃないかな、といつも思う。

だったら、どう生き続けるのか、という質問をしなくて、立川さんの「作品としてのデヴィッド・ボウイに何でもっと気づいてくれなかったんだろう。作品と商品の境目がなくなって、今こうですよね」というコメントだけがポンと入る方がよほどいいと思う。特にラジオというメディアは、リアルにこの人が興味を持っているのか、あるいは仕事をしているのかが聞こえてしまうので、インタビューというのは他に方法がないのか、ということを感じる。

F1 に強い TFM ということを出しているのであれば余計に、F1 はおそらくデヴィッド・ボウイのことを知らないのだから、例えば、「30 分でわかるデヴィッド・ボウイ講座」の方が、良かったのではないかな、と思う。思い入れがない世代には、亡くなったことをきっかけに、デヴィッド・ボウイのことを初めて知ったり、曲は聴いたことがあるけれども、あ、これってデヴィッド・ボウイだったんだ、という

ような作りの方法もあったんじゃないかな、と。これから多分、いろんな大物ミュージシャンが亡くなっていく中で、「新しい追悼番組」を考えるきっかけになる気がした。

○オーソドックスな追悼番組で、よくできているけれど、予測通りだった。予定調和の追悼番組という言葉は、以前もこの会で大瀧詠一さんの追悼番組の時にも出た。やはり、思い出の羅列ではダメだし、撮影秘話だけだと飽きる。今回のデヴィッド・ボウイについてもそうだが、スタッフが切り口を工夫して考え、どの視点から深く掘り下げたいかを最初に決めていかないと、聴かせる番組としては難しいなという気がした。

○大変気持ちよく聴けた。本編に入る前に、各国首脳による弔辞を日本語と英語で入れた効果によって、番組がとても立体的でリアルに感じた。立川さんの話にしても鋤田さんの話にしても大げさではなく、自分たちが実際に仕事をして一緒に過ごした時間で得た経験談の範囲だったので素直に聴くことができた。

マイケル・ジャクソンが亡くなったとき、特に日本のメディアがアメリカのメディアとどこが一番違ったかという、マイケルのことを聖人君子のように扱っていたこと。10年間に渡る児童虐待報道などの問題がまるでなかったかのように、フラットなヒーローとして扱っていた。そういう聖人の投影がこの番組にはなかったことも、とても良かったと思う。

ただ、ターゲットにしているリスナー層に、それがリアルとして伝わる訴求力がある番組だったかという、それはおそらく難しいだろう、と思った。何故なら、その時代の音楽の感触が、若い人には伝わらなかったと思う。その時代の空気感や感触をどうやってターゲットに捕まえさせるかということが課題だと思う。どういう時代の中にデヴィッド・ボウイが立っていたか、ということがもっと理解できるような工夫が必要だったのではと思った。しかし、全体を通して誠実ですごくいい番組だったと感じた。

○このようなビッグネームのスターが亡くなったときの追悼番組というのは、どの層に届くか、ということを見ると、すごく難しいと思う。すごくコアなファンもいる一方で、名前だけ知っているけれども、ちゃんと聞いたことなくよくわからない、というファンもいる。全部の層を狙っていくというよりは、ターゲットを狙う方がいいのか、その匙加減がすごく難しいな、と感じた。

実際にデヴィッド・ボウイと仕事をしたことのある生き証人のエピソードは、写真をイメージできる人であれば理解できるだろうと思った。しかし、TFM がいちばん強い女性リスナーたちが聞いたときにどう思うか、デヴィッド・ボウイの音楽を聞いたことのない女性たちが聴いたときにどう思うか、と考えた。

追悼番組というのはいろんな意味があると思うけれど、名前だけ知っていた人が

亡くなるというのは、音楽の再発見のチャンスでもあると思う。その観点から今回の番組を聴くと、いろんなものを革新的に取り入れていて、ロジックで音楽をやっている、何かすごい人だ、っていうことは感触としてわかる。しかし、彼がどういう問題意識を持っていて、どういうことを問うたのか、というところがあまり見えてこなかった。どういう時代背景にビビッドに反応して、革新的な表現をしたとか、このような理念や政治的な意見を持っていたなど、作品にフォーカスした説明がもう少しあったならば、ターゲットである女性層に人物的魅力にプラスして音楽理念も伝わり、番組に強度が増したと思う。

○大事なのは、音楽もファッションも時代によって捉えられ方が全く違う、ということ。デヴィッド・ボウイのファッションも音楽同様に革新的であったと言われるが、その大きな流れの元にはビートルズがあった。ビートルズの革新性も最初は受け入れられなかったが、そのうちにいい音楽だということがわかって大流行し、70年前に解散している。そのときの音楽ファン全体の喪失感の間隙を突いて出てきたのが、デヴィッド・ボウイのグラムロックだったということの説明が必要だったと感じた。

さらに、イギリスという非常に保守的な国の特性から、ビートルズ以前には世界にお披露目できるトレンド文化はほとんどなかった。それもあってイギリスの若者文化として紹介されたデヴィッド・ボウイはそれこそ今のロックの元祖ビジュアル系とも言えるわけで、風俗として非常に面白かったと思う。だから、デヴィッド・ボウイの説明をする際にルックス抜きにラジオで魅力を伝えること、の難しさを感じる。音楽といってもパフォーマンス込みの魅力が大きいわけで、この番組の展開は言葉足らずに感じた。

デヴィッド・ボウイ自体を知らない人も多いと思うので、ビートルズからの音楽的系譜などヒストリカルな部分をもう少し押さえておくと、この番組から受ける印象がもっと変わったのではないかな、と思う。今、デヴィッド・ボウイの恰好を見ても誰も驚かないけれど、当時は唯一無二の宇宙人感が出ていた。世の中の状況とのコントラストというのは、何かヒットするときには必ず作用していると思う。そこを丁寧に表現することで、「宇宙(そら)に還ったロックスター」というタイトルの意味も理解できる。

人格の良さをフューチャーしていた部分もあったが、デヴィッド・ボウイもドラッグで沈んでいた時期もあった。亡くなったことで一気に聖人化せず、ドラッグからどうやって復活したとか、そういう内容を入れてみると、もっと人間臭さが出て人の興味も惹くと思う。そういう意味でも今回の試聴番組を聴いて改めて、追悼番組の難しさ、というものを感じた。

先日の大瀧詠一の追悼番組の場合は、露出の全くない作品性の高いアーティストだったので成り立った部分があったと思うが、今回のデヴィッド・ボウイのようなポップヒーローや、カルチャーと連動していたスターをラジオで伝えるためには、

それなりの切り取り方が必要ではないかと思った。先ほども話に出たとおり、これから、どんどんビッグネームのアーティストたちが亡くなっていくので、自然と追悼番組が多くなると思うが、本日、貴重な意見がたくさん出たので、いい意味で本当に意義深いものにしていただきたいと思う。

■亡くなった翌日は、朝から晩までデビット・ボウイの曲を各番組で紹介し、若いリスナーに対してもデビット・ボウイがどんな人物であるかということや音楽性については一通り網羅した解説をした。今回の試聴番組は、その上での象徴番組だったので、今回のような落としどころになっている。

○結局、思い入れがある人のための番組か、社会ニュースとして、亡くなったことを受けての番組なのか、のいずれかのチョイスをしなくてはならないと思う。もし自分がこの番組の構成をするのであれば、今日はデヴィッド・ボウイが亡くなったので追悼番組をやります、とはならない。何に優位性を置くかということ、多分、鋤田さんのニューヨークの友達が電話で伝えてくれたあのリアリティのある電話のコメントから入る。追悼集会の前まで行ったんだけど、人がいっぱいいて、何か涙があふれちゃって、前には行けなくて、っていう、あのリアルさ。そこで、デヴィッド・ボウイ特番って言えば、TFM だけの取材音源だ、よくぞ取ってきたな、というように感じると思う。TFM ならではの格好良さやスタンダードさがあるから、今回のような番組を今後も踏襲するのか、ちょっと民放ならではのあざとさを取り入れていくのか、というのは今後のステーションとしてのテーマだと思う。

■55 分の番組なので、ナレーションではヒストリー部分はほぼ網羅している。楽曲はナレーションをフォローアップするかたちで差し込んでおり、演出意図としてあまりライナーノーツ的なことには触れず、人間性を中心に展開していった。一方で、どこか心地いい同窓会みたいになってしまいかねないところは確かにあったところだと思う。鋤田さんにしても立川さんにしても、70 年代の音楽シーンの皮膚感を持っている方たちじゃないと伝えられないだろうな、という部分があったので、このキャスティングと内容になった。

○これは、今後の TFM 全体に関わる重要な問題だと思う。特番をやるのも大事だが、例えば SCHOOL OF LOCK! のような 10 代リスナーが聴く番組で、デヴィッド・ボウイというアーティストを教える指南役を置き、特集する方がもしかしたら今っぽいかもしれない。

■TFM での今後の「追悼番組」の在り方について考える、いい機会になったと思う。本日皆様にいただいた貴重なご意見を元に、試行錯誤しながら、今後も TFM らしい番組作りができるよう尽力したいと思う。

5. 放送番組審議会の内容について

審議会の意見は、放送番組審議会事務局から各担当部長に伝達した。

6. 公表

議事内容を以下の方法で公表した。

① 放送:番組「SPO☆LOVE」

2月27日(土)5:00～6:50放送

② 書面:TOKYO FMサービスセンターに据え置き

③ インターネット:TOKYO FMホームページ内 <http://www.tfm.co.jp>

7. その他

次回の放送番組審議会を、3月1日(火)に開催することを決めた。